

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 運輸省特例郵便物取扱部特許第六二七号  
平成二十六年二月一日発行(第四百十七卷第二号)

# ホトトギス

二月号



## 俳句随想 〔三百八十〕

汀子

一年が忽ち過ぎていくように思うのは年を取ったからかも知れない。しかし、生涯の幕を閉じるまで勉強だと思ふ。我々の若い頃の勉強は、戦争のために随分出来なかつたかと思ふが、かえつて今のようには俳句を楽しんでいる時の方が様々なことを吸収しているように思ふ。作る俳句、選ぶ俳句、書く文章、読む文章など全て今が勉強であると思ふ。

依頼されればそれに応えるためにする勉強も徒やおろそかには出来ない。そのために時間はどんどん過ぎていく。ふつと気がついたら今年ももう年末に近い。時間ももつと欲しい。熱中して俳句を作り文章を書くことは苦しいが楽しい時間だと思ふ。

今、NHKから依頼された『俳句十二か月』の第二弾になる本の締切に追われている。時間が足りない。能力が足りない。あと一日しか余裕がない。書き上げられるか、何としても遣り果せなければならぬのである。『虚子百句』も大変であった。この度、出版した『俳句と生きる』汀子講演集も大変であったが、出版して良かったと思つている。皆様に読んで頂いて御感想が頂きたい。

# 句日記 汀子

平成二十五年二月二日 芦屋ホトギス会

春を待つ心に耐へて行けるもの  
風二月全き富士にある名残  
遠ざかる富士に春待つ心切

二月二日 下萌句会

回復といふ文字春を近づけて  
富士晴れて全き姿春隣  
春隣齒科に整形外科通ひ  
節分といふ日忽ち過ぎゆけり

二月四日 ロイヤル俳壇

富士山の旅も終りぬ寒明くる  
早梅のどこか香りのただよへる  
積ること稀な雪解を惜みけり  
寒明と聞けば心の添ひゆける  
寒明も心の節目なりしかな

二月八日 工業倶楽部

ほころびて所在明かせし梅白し  
診療に向かふ明るさある二月  
鶯や鳴かねばそれと気づがずに  
地に下ろす盆梅やがて一面に  
二月十二日 大阪倶楽部  
梅固し二三ほころび初めながら

下萌や二ヶ月先のこと思ふ  
明るさに油断すまいぞ冴返る  
やうやくに二月礼者として逢ひぬ  
気になつてをりしが二月礼者とし  
計画は現実として梅二月

二月十二日 綿業倶楽部

計画は計画として浅き春  
薄氷となりて失せたる光かな  
動きある池の薄氷失せてをり  
ふり返る日々は戻らず春浅し  
取り戻す月日に春の浅きこと

二月十四日 清交社

明るさに添ふ春となりゆけるかな  
未来なほあると信じて木の実植う  
なほ残る虚子の常宿京の春  
木の実植ゑ子等の未来を托しけり  
予定組む電話一本春の旅  
手荷物軽くがよしと旅の春

二月十九日 有恒俳句会

傷癒えてゆく二ン月も半ば過ぎ  
二月十九日 無名会  
残雪の消ゆる早さに追ひ越され  
猫柳客の視線をとらへたる  
体調を案じる便り冴返る

どこまでも視線つなぎて猫柳  
残雪のたちまち消ゆる地に住みて  
やうやくに光を得つつ猫柳  
猫柳ほほけ初めたる枝の先

二月二十日 夏潮句会

立春といふ節目より満つるもの  
春寒をかこつことにも馴れて来し  
ぎいと鳴る春炬を入れし部屋のドア  
立春の過ぎたることも忘れけり  
二月二十一日 第四回永田青嵐俳句大会  
野水仙香る日和の島を訪ふ

二月二十一日 時雨会

早春の旅路一泊なりしこと  
午後はもう山より届く雪解風  
白梅に立ち紅梅に話し込む  
梅早し遅しと虚子の誕生日  
雪解風第一陣でありにけり

二月二十八日 きとらぎ会

祝ぎ心とは春らしく集ひけり  
忽ちに恋猫としてふり向かず  
地に下ろす梅の根づきて幾年ぞ  
梅咲かず遅速のありてあるがまま  
二百回重ね来しこと梅椿  
梅が香に紅白ありてなき如く

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年二月二日 菅屋ホトトギス会

水仙の香に彩られゆく岬  
水仙の香に彩られゆく岬  
水仙の香に彩られゆく岬  
水仙の香に彩られゆく岬

二月三日 野分会菅屋例会

俳号が雪崩のやうに決まる君  
俳号の決まり春待つ心はも  
京菊菜はんなり香るおぼんざい  
春菊の躍るより鍋香り来る  
大雪崩一山消えてゆきにけり

二月五日 むさし野吟行会

花びらの襲の底より春立ちぬ  
温む水覆ひ尽してゆく羽音  
紅梅の明日は咲かんとする震へ  
邂逅は二月礼者として句座へ

二月七日 蕉心会

春寒き忌日の朝でありにけり  
ラーメンを啜り忌日の句座ぬくし  
スクリューに揉みくちやにされ温む水  
温む水統べ大川のゆりかもめ  
先週は未だ都鳥だつた君  
あんなことして黄沙まで降らせるか  
白梅の香に句心と忌心と  
白梅に鳥語刺さつてをりにけり

二月十一日 朝日カルチャー若草句会

公魚や榛名嵐に翻り  
早春の風音に水音に覚め  
積まれたるまま残雪しなる都心  
公魚の穴を飛び出す孤高かな  
早春やもうあなたとは駄目なのね

二月十四日 土筆会

白魚の命の重さ揚げられし  
冴返るローマ教皇退位とや  
人間も群れたがるもの犬ふぐり  
騙ることなく主役めく犬ふぐり  
残雪といふときめきの富士であり  
道迷ひ獺の祭に出くはしぬ  
その中に子規居り獺の祭かな  
昨夜ありし獺の祭の忘れ物  
遠山の残雪雲と存問す  
残雪を割りて畑の息吹かな  
パチカンも獺の祭も大騒ぎ  
その俳号僕は好きだよ獺祭

二月十六日 六甲会

この岩に獺の祭の昔あり  
春寒やモノク口となる大都会  
下萌の土手に犬鳩鴉子等  
春寒くあの日を語るあなたの目  
春寒や白き妖精舞ふ稲城

二月十九日 草木瓜会

下萌ゆるとは空の蒼水の青  
京女水菜しやつきり洗ひけり  
二の替星になりたる彼の二人  
うちちごてあんさんとこは京菜どす  
冴返るコンクラーベの近き国  
二の替鳴呼勘三郎団十郎  
冴返る虚子も歩きし丸の内  
日に弾け風に磨かれゆく野梅  
獺祭めく酒盛りでありにけり  
和食屋を出て恋猫となりゆく夜  
人小さく雪崩に吞まれゆく速さ  
こいさんの煮はつた菊菜おいしゅおす

二月二十一日 登高会

二月二十三日 伝統俳句協会関東支部千葉部会

二月二十四日 野分会東京例会

二月二十六日 若水句会

二月二十七日 目黒学園句会

生命の神秘末黒の芒かな  
ハーモニ一整ひてより春の波  
師弟句碑一基末黒の芒中  
江戸の世を偲ぶこの坂春の町  
波稜草今日も湯掻いてをさな妻

# 雑詠

## 廣太郎 選

箱根路は山中に咲き曼珠沙華 熱海 嶋田一步  
風擱みぬし揺れやうや曼珠沙華 同  
あくまでも真つ赤と言へて曼珠沙華 同  
虚子朱筆六十余年や土用干 福山 竹下陶子  
千人針乱によごれ終戦日 同  
満天のギリシャ神話やキャンプ更け 同  
馬肥ゆる四肢は大地につながらりて 神戸 立村霜衣  
降り止まぬ日差しのさ中馬肥ゆる 同  
唇の甘さ林檎に触れしゆ糸 同  
地に残る空のできごと野分後 龍ヶ崎 今橋眞理子  
雲の湧く気配とてなき月今宵 同  
夜仕事の灯色積み上げ丸の内 同  
炎帝にこん畜生と立向ふ 相模原 木村享史  
祭の子何を買うたるかは見せず 同  
虚子語りながらの涙生身魂 同  
秋遍路昭和一桁同士なる 東京 大久保白村  
秋暑しぐわんばれ雨を呼ぶ男 同  
花野とはいつも佳人に逢へる場所 同

秋霖や賽銭の音しめりがち 同 橋本くに彦  
秋蟬の落ちし余命を手の中に 同  
初鳴を待つ名園の水面かな 同  
つながらぬネオンサインやそぞろ寒 同 田丸千種  
この頃は茶会もなくて露の庵 同  
金木犀行きに帰りに会ふ男 同  
大怪我にしじみ露の身と思ふ 長岡 安原 葉  
骨に罅入りし露の身かばふ日々 同  
怪我したる互ひ露の身励まして 同  
魂を吸うては鳴いて秋の蟬 静岡 須藤常央  
初秋の山河雲より動き出す 同  
空吸つて吸つて稲穂の育ちゆく 同  
半分の命突き上ぐ大夏木 渋川 木暮陶句郎  
流れくる昔の時間堂涼し 同  
大仏に心塗りつぶされ涼し 同  
わが身より離るる一語露けしや 熊本 岩岡中正  
ついてくる己が足音露けしや 同  
秋時雨淋しさは山越えてくる 同  
椅子の上に秋が坐つてをりにけり 群馬 中杉隆世  
秋の翳飛べるものにもありにけり 同  
爽やかな男の子となつて来りけり 同  
天高し近江に淡海てふ奈落 奈良 古賀しぐれ  
祈とは無音の世界露の秋 同  
野菊晴横川は一人歩くべし 同

# 雑詠句評（十一月号より）

千鶴子・むつみ・保佳

中正・憲明・眞理子

美奇・葉・静龍

とほ歩・廣太郎

## 日はいのち月はこころを育てけり 真面 井上浩一郎

全ての生命の源は太陽である。天の岩戸の神話の昔から、太陽がなければ生命は存続し得ない。地球上の生きとし生けるもの、全ての生命のエネルギーの根源となるものは太陽である。

本来生命がなければこちらも存在しないものなのだが、ここで作者の言いたいのは、生命を超えたところ、人間は考える蘆である、というところの世界、なのだろう。それはおかし、という考えの方もおられるに違いない。

人はそれぞれ考え方が違う。いくら論を戦わせてもそれは議論にはならない。美しい月を仰いで、感動する、感動のあまり、作者はこのように感じたのだろう。ちよつと理屈っぽい、それで良いではないか。（千鶴子）

太陽と月は、古今陽と陰のイメージとして捉えられてきた感が

あるが、確かにどちらかといえば生命の営みに直接係わるのは太陽の方であろう。しかし作者はその事を踏まえながらも季題である「月」に「こころ」という人間の深さを見て取り、見事な詩として昇華させたのである。（廣太郎）

## 細く長く夜のつづくや風の盆 東京 田丸千種

風の盆とは誰もが知っている富山県八尾のおわらの踊りで、高橋治の「風の盆恋歌」からさらに全国へ行きわたり、大勢の人の訪れるところとなった。あの哀愁を帯びた胡弓の音とおわら節、そして静かな舞いに触れるとまた来なくなるのが風の盆である。九月一日二日三日と続き特に最後の夜は朝方になって静かにそれぞれの町に帰ってゆく姿に言葉では言えない情緒がある。水音に沿った坂の多い町を三日三晩踊り明かす風情を「細く長く夜のつづく」と表現したところにまさに「風の盆」の本質が詠まれている。加わる胡弓の音と静かな舞いの余韻が滲みでている。また行きたくなってきた。（むつみ）

ホトトギス壱千四百号記念祝賀会でも演奏された「風の盆」である。作者は地元八尾で見られたのであろう。筆者も見ただ事があるが、胡弓の音の哀愁の漂う雰囲気は一種独特である。その姿を的確に捉えている句で、何といつても「細く長く」という言葉が季題を引き立てている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

余花に会ふことも吉野の風情かな  
 徳川の墓所てふ余花のありどころ  
 懇ろなもてなしもまた月の宿  
 六甲も海も今宵の月の街  
 土に刺しある割箸で菜虫とる  
 菜虫とる葉を裏返し裏返し  
 通草爆ぜ綿にくるまる種の数  
 にぎやかに去る地車や秋日濃し  
 ハンモックとは載りにくく落ち易く  
 駅出れば炎天を歩す外になく  
 糸瓜忌や足の踏み場もなき書齋  
 さわやかに子規に捧ぐる一句かな  
 星明りしとどに続く露の径  
 泣きたくて濡れたくて来し花野かな  
 星すべて消し仲秋の月孤高  
 供華添へて忽ち秋暑解きし句碑  
 三方の由々しき月見団子かな  
 これがその料亭ぶりの衣被

東京 稲畑廣太郎  
 同 安原 葉  
 長岡 今井千鶴子  
 東京 榎原 稲岡長  
 同 大坂 林直入  
 同 熊本 岩岡中正  
 同 東京 河野美奇  
 同 金沢 藤浦昭代  
 同 神戸 後藤比奈夫  
 同

江戸子選

尼御前の月仰がるゝ泪あり  
 大月夜てふ芸術の日本に  
 澄む水に瀬々の玉石きらめける  
 豊の秋たしかにしたる穂の孕み  
 廻り来る色の淋しき走馬灯  
 華やかに見えて寂しき走馬灯  
 オリオンの傾きそめて冴返る  
 白魚や五臓六腑のなきごとく  
 青蜜柑我に返りしごとく匂ふ  
 葛の花活けて真葛原の生る  
 風走り平城宮址草の秋  
 宮跡といふ秋風のがらんどろ  
 夜の月疲れをほどく家路かな  
 丸ビルに新丸ビルに映る月  
 秋晴や良いお日柄と言ひし母  
 肌寒の度合日に日に増す朝  
 打ち続き立待月も晴れぬべし  
 芦屋とてここら下町秋祭

福山 竹下陶子  
 同 仙台 赤川誓城  
 同 群馬 小林敏朗  
 同 茅ヶ崎 山元土十  
 同 神戸 後藤立夫  
 同 奈良 古賀しぐれ  
 同 東京 藤森莊吉  
 同 吹田 宮崎 正  
 同 神戸 三村純也  
 同

# 天地有情句評

汀子

通草爆ぜ綿にくるまる種の数 樋原 稲岡 長

爆ぜた通草の実の種の様子。

ハンモックとは載りにくく落ち易く 大阪 林 直入

乗り降りの難しいハンモック。

余花に会ふことも吉野の風情かな 東京 稲畑廣太郎

吉野山の桜の咲くのに遅速がある。余花も風情と見た。

懇ろなもてなしもまた月の宿 長岡 安原 葉

月見を楽しむ宿のもてなしに心足る作者。

土に刺しある割箸で葉虫とる 東京 今井千鶴子

何時来ても葉虫駆除が出来る畑の暮らしぶり。

樋原 稲岡 長

大阪 林 直入

大阪 林 直入

大阪 林 直入

糸瓜忌や足の踏み場もなき書齋 熊本 岩岡中正

足の踏み場もない作者の書齋に子規を偲ぶ。

星明りしとどに続く露の径 東京 河野美奇

露の降りた径に濡れながら星を仰ぐ夜。

星すべて消し仲秋の月孤高 金沢 藤浦昭代

星を寄せつけない月明かりの夜空を仰ぐ。

(以下略)